

私にとっての卓球「家族の絆」

土浦日本大学中等教育学校
二年 廣瀬 裕貴

「うおー!!すごい!!」

僕は興奮して、その試合に釘付けになった。今年のインターハイ男子団体決勝、青森山田対野田学園。一球一球決まるごとに会場はどよめき、僕は手に汗を握っていた。

小さい頃から病気と闘ってきた僕は、スポーツが得意ではない。中学に入学して、どの部活に入るかすごく悩んだ。周囲の人からは、

「やっぱり卓球部でしょう。」

と言われ、僕はそれがプレッシャーでならなかった。やっぱりと言われるには、理由がある。父は今年念願の、インターハイ男子団体初出場を果たしたチームの監督をしている。僕は小さい頃から、父の居る練習場に遊びに行く事がよくあった。でも、なかなか卓球を始める勇気と自信を持つ事ができなくて、自分から避けてきたような気がする。

卓球部入部を決心できないまま、僕の中学校生活はスタートした。部活見学期間に、一度くらい見てみようかと卓球場へ向かってみた。普段見ている父の学校の部活とは違う雰囲気には僕は少し驚き、なんとなく僕にもやっていけそうな空気を感じた。さらに一日じっくり考えて、僕はついに卓球部への入部を決めた。運動部入部に不安いっぱい母と、なんとなく嬉しそうな父の顔が印象的で忘れられない。

父に貰ったお下がりのラケットは少し気恥ずかしかったけれど、僕はすごく嬉しかった。なんとかルールを覚えてフォア打ちが少し続くようになった頃、初めての試合があった。しかし、何もできず立っているだけで終わってしまい、悔しくて悔しくて仕方なかった。勝負なんだから、やるからには勝ちたいと心の底から闘志がわいてきた。僕はどんどん卓球にのめりこんでいった。勉強も頑張る約束で、部活以外に練習する時間を増やしたが、それでもなかなか勝てないまま一年が経った。

なんだか最近口うるさい母と、少し神経質な父の言葉にイライラする事が多くなった。つい口がすべって、心にもない言葉が出てしまう事もあるが、なぜか卓球をしている時は素直になれる。友人は試合会場に両親が応援に来る事を嫌がるが、僕は張り切って応援する母と冷静なアドバイスをしてくれる父から、パワーを貰えるような気がする。

「ヨオーツ!!ヨオーヨオー!!」

インターハイ男子団体初戦で、父が率いるチームの試合が始まった。僕は精一杯、一球一球に祈りを込めるように応援の声を上げた。試合は残念ながら負けてしまったが、僕は卓球と向き合う父を誇りに思っている。いつか僕も、インターハイの舞台上でプレーしたいと思う。もちろん父が監督で…。きっと母は、一段と張り切った応援の声を上げるだろう。

一歩踏み出す事で、僕が得たものは大きい。健康な身体と強い精神力はもちろん、卓球を通して結ばれた家族の絆は、僕の一番の宝だ。